

水底から見上げた川面は白彩が舞っていた。生温い水の肌が首筋を撫でながら、行き過ぎていく。沈んでいく。

静かに沈んでいく。

無為に伸ばした右腕、広げた指の合間をぼつりと泡がすり抜けていく。行き着く先は、閉ざされた水の蓋。落ちていくのは、削られ行く泥の肌。其の合間で、河童はたゆたう。冬の川、雪の積もる地表よりも、表に薄く氷の張った水の方が幾らかは、温かいと。経験から、知っていた。銀色の肌をした魚が頬の横を行き過ぎる。幾ら閉ざされ様と、水の流れに変わりは無く、全てはうつろうばかり。時間は全てを押し流していく。重力は高くから低くへと、重力の誘い手を緩める事は無く、笑いながら全てを誘い続ける。水は高くから低くへ、風も高くから低くへ。花の香りも雪の冷たさも全てはうつろい続ける。人の思惟など聞きもせず、人の意思など知りもせず、摂理にだけ耳を貸し。沈んでいく。

静かに沈んでいく。

河童は、冬の川に沈んでいく。

色彩は既に細分され続ける。

分かる形で咀嚼され続ける。

分類され、分割され、分別され、分断された場景の色彩と光彩に一つ一つ名前をつける。そうやって、言葉を持つ物は、何かを理解し続ける。けれど、例えば、どうやっても仕分けの出来ないモノばかりが手元に残った時に、心あるモノ達は何を考えるのだろうか。そんな、如何でも良い事ばかりが、水の流れ、空気の泡に混じりながら頬を撫でながら行き過ぎていくのに、薄く笑うしかなかった。沈んでいく。

けれども、川底には程遠い。

そして、水面も程遠い。

そんな場所で、流され続ける。生温い川の水ばかりが、肌の上へと指でなぞる様に行き過ぎていく。其れが良い。其れで良いんだ。其れが、心地良い。

冬は好きだ。

寒いのは嫌いだ。雪に足を埋めた時に、脛に突き刺さる氷の残酷な冷たさなど大嫌いだ。首筋を行き過ぎる透明になり過ぎた風の指先は刃物の様だ。

透き通った水の色。冬には全てが透き通ると、河童は、ぼんやりと思った。空は灰色に透き通り、地面は白く透き通り、そして、水は無色に染まっていく。無色という色を人は知覚する事が出来ない。何故ならば、色が無いと云う色が其処にはある筈なのだから。其処には色が無い。確かに無い筈なのだ。けれど、河童は伸ばした指先越しに冬の陽射を見つめた、其れを語る言葉を誰も持っていない。透明とは違うのだ。其処には、「無い色」があつて、色があると云う事は、他の状態は、情景は、場景は、全部「無い色」に塗り替えられてしまうのだから。けれど、其処には色が無い。幾千の言葉を以つても、誰も、其れを語る事が出来ない。だから、無いのだ。其処には色が無い。でも、色はある。誰も其の向こうの色を見る事が出来ない。無色とは、そう云う物だ。

低くに流れていく水の流れに身を任せながら、河童は思う。多分、其れはこんな景色なのだろうと。

目の前では青く白く皓と川面の氷が透き通る。

けれど、其処から先の、空の景色を見る事が出来ない。白くは無色、灰色でも無い、黒くも無いのに。

けれど、此の中は、氷に閉ざされた冬の川はいつだって暖かい。寒くは無色、暑くも無い。夏の川は逆だけれど。川はいつでも、疎ましい物から自分を助けてくれる。別に、外が嫌いな訳じゃない。只、此処に帰れば、全てを洗い流してくれる、そんな気がするだけで。そんな場所が、あつたつて。沈んでいく。

静かに沈んでいく。

不意に、一つ、銀色が目の前をかすっていく。

何だろうと、呟いた言葉が気泡となって凍る空へと向かって、ぼつりと昇っていく。

そして、不意に、ぐいと首筋を無理からに引かれる力を感じて、気がつけば、河童の身体は空へと落下し始めていた。

「ふむ、思わぬものが釣れたな」

山の川辺、其処に厚手のコートを着込んだ少女が釣竿片手に呟いた。辺りは、厚く積もった雪が木々と地面を覆い尽くし、白一色で染め上げる。乾いた風がさよと少女の編んだもみあげを躍らせる。

「おい」

手にした竿の垂らした糸、其の先には一人の少女が吊れ下がっていた。服の襟には糸へ括られた針が、がつちりと突き刺さり、其処だけを支点に首筋だけで吊られる姿は、滑稽を通り越して、僅かに惨めだった。

「今日は河童鍋か。まあ、癖は無いかな。なあ、煮れば亀みたいな出汁取れる？」

「おい」

「草食類は肉に癖が無いけど、お前のはどっか生臭そうだな。どうだ、仲間内でそんな話聞かないか？」

「おい」

「胡瓜ばかりなんだろ、どうせ食ってるの。でも、お前、意外と筋が硬そうだもんな」

「おいつつってんだろ、ドタンチン！」

吊るされた少女、河城にとりが、こめかみに筋を立てながら怒鳴れども、当の釣った本人、霧雨魔理沙は素知らぬ顔で、尚も言葉が続ける。

「ドタンチンって、如何云う意味だ？」

「此の状況で、如何でも良いだろ、そんなの！ 離せよ、腐れ外道！」

「腐れ外道は酷いな。乙女心が傷つくぜ」
ふうと、わざとらしく首をすくめる。

「そんな繊細な乙女心あるんなら、家で大人しくボエムでも綴ってるよ！ 何で、河童釣ってんだよ！ てか、早く離せよ！」

「最近の河童は、短気だな。長生き出来ないぜ？」

「今直ぐ三途の川に送るぞ、不良魔法使い」

「つか、別に手で簡単に外れるぜ、其の針？」

「え、そなの？」

「ああ、サーチ能力は魔法で添付したが、只の針だからな。ああ、指先怪我しない様に気をつけるよ」

「だってら釣るんじゃないよと、ふつふつと文句を言いながら、吊られたままの姿にとりは手を首筋に伸ばす。返しについていない、単純な釣り針は指を掛けるにあっさり食い込んだ布地から抜け、そして、重力の腕が、其れまたあっせりと彼女の身体を水面へと引き摺り落とす。

「ひゅいっ！」

ざばりと急に落とされて、一部だけ割られた川の水の上へと水飛沫が舞った。

「河童はアグレッシブだな」

ふくふくと気泡が幾つか湧いた後で、ざばりととりが顔を出した。

「文句言いたげだな」

「どっから云えば良いのかさっぱり検討つかないよ」

「そりや、お気の毒に。釣っちゃまったのは、済まなかったが、其の後はお前のうっかりだぜ？」

「分かっている。だから、怒りのぶつけ場所が分からないんだよ」

川の氷を拳で殴りつけながら、憤りを隠さないまま、にとりはこちた。

「何だって、そんなに怒ってるんだ？」

「あんた、昼寝の最中にいきなり釣り針で釣られたら怒らないの？」

「一発ぶっ飛ばしたいな」

「今、そんな気分だよ」

「そりや、不運だったな。流星の私も昼寝の最中に強風の所為で窓ガラスが割れて、石がいきなり飛び込んできたら、せつなくはなるが、怒りはしない」

「何、あんた、強風と同格張るつもり？」

「私は何時だって、夢見る乙女だぜ」

「夢見る乙女は山で川釣りなんかしてないで、家でアツプルバイでも焼いてるよ」

「残念、お菓子は食べるの専門だ」

「最近の夢見る乙女はぐうたらだね、全く」

で、と川面に顔だけ出しながら、河童は言った。

「あんた、こんなところで釣りなんかしてると、天狗様に怒られるよ？」

「ああ、ブン屋か？ まあ、其処は乙女のお茶目って事で許して貰う方向で」

「まあ、痛くされんのは、あんただから良いけどさ。

忠告はしたよ、盟友。じゃ、今度はちゃんと魚釣ってよね、河童じゃなくて」

「ああ、勿論だとも」

ざばりと少女が水に沈む。

糸を手繰り寄せると魔理沙は、針の先を掌に落とすと、何事かを呟いた。ほうと青白い光が針の先に宿る。灯ったままの釣り針を、川の中へと投げ入れる。

数秒の時間、静寂だけが流れた。

ひくと、釣竿が揺れたのを合図に、思い切り振る。